

## 下ノ加江小「防災参観日」における講話内容について

### —長野水害碑の碑文を通して大正九年豪雨災害—

2月2日午後より「下ノ加江小学校防災参観日」で大正九年(1920)8月15日に発生した台風による水害について取り上げ、下ノ加江地区に建立されている4基の水害碑のうち、長野に建立されている「水害記念碑」を中心に30分程度の講話をさせていただきました。この様子は、高知新聞清水支局長・小笠原舞香記者に取材いただき、2月4日(土)の高知新聞記事として27面に掲載いただきました。今日は、その講話の内容を掻い摘んでご紹介させていただきます。

下ノ加江川右岸の長野に建立されている「水害記念碑」は、下ノ加江耕地組合が昭和4年1月に建立した石碑である。碑文とその注釈は、裏面に掲載しているので参照いただきたい。まず、高知新聞の前身ともいえるべき「土陽新聞」8月21日付けの記事に「大正九年豪雨災害」の被害の状況が、現在の宿毛市を中心に大きく取り上げられている。大見出しには「本縣未曾有の大惨災禍 惨憺たる幡多郡の被害 郡内死者百名に達す」とある。

また、長野の「水害記念碑」には、災害当日、夜半より豪雨と閃光を伴う雷が轟きわたり、竹槍が大地を刺すがごとき豪雨に強風が吹きつけ、山肌が崩れ、上流から濁流とともに沢抜けによる地滑りで大量の木材があちらこちらに流れ、濁流がいよいよ勢いを増し、滔々と押し寄せ、堤防の決壊と道路の破壊もたらした。田畑に砂礫が砂漠のように厚く堆積した。この惨状を前に地域住民は、困り果て茫然自失し、何も希望を見いだせずいた。

ただし、碑文は、決して悲劇で終わってはいない。地域住民の反転攻勢のドラマが刻まれている。「住民が評議し、一致団結し、復興を決意したこと。整理組合を組織して災害翌年の大正10年1月に復旧工事が開始され、昭和4年1月に完了したこと。この間、実に8年。これにより前より数段、灌漑設備や耕地の使い勝手がよくなったこと」等の喜びの記録が石碑に刻まれている。そして、この工事に関わった役員の氏名が一人ひとり勇者のように刻まれ、顕彰されている。最後が悲劇の記録で終わっていない。このことが非常に重要なことである。困難を乗り越えた地域住民のまさに「凱歌の歴史」である。

日本が今、直面している「少子高齢化」。土佐清水市にとってもそのことが将来に大きく影を落としている。下ノ加江小学校も盛時にはたくさんの児童がいた。現在、児童数が全校10名と大幅に減少している。

これら地方の疲弊は、最も憂慮すべき課題の一つである。その課題解決は、もはや一県・一市のレベルでは解決は困難である。ここで、先人たちが幾多の試練を乗り越えてきた歴史に学ぶことが重要である。そんな思いを講話の中に織り交ぜた。

最後に、長野の「水害記念碑」の碑文起草と書を書いたのは、溝渕政次郎(素江)である。素江については、『新土佐清水市史』第6章「以南偉人伝」で詳しく記述する予定であるが、ここではごく簡単にその足跡を紹介するに留めたい。

溝渕政次郎(1866～1945)は、幡多郡伊豆田村(現在の下ノ加江地区)で生まれた。幼い頃

より寺子屋に入り勉学に努めた。幡多郡中村(現在の四万十市中村)の医師吉松純(1836~1908)に師事し、漢学を学んだ。その後、下ノ加江郵便局長溝渕嘉三郎の養子となり、昼間養父の郵便局で働く傍ら、夜間は私塾「溝渕義塾」を開設した。これが後の「伊豆田村立伊豆田塾」のもととなる。以降精力的に人材育成に努めた。

結果、政次郎は、衆議院議員大西正幹(長男は元郵政相大西正男)ら優れた人材を育成・輩出した。素江は号。昭和2年7月15日銘「五味天満宮天災記念碑」、昭和4年1月銘「下ノ加江長野水害記念碑」の格調高い碑文と文字は彼が作成し、書したものである。

「下ノ加江長野水害記念碑」(碑文翻刻)

【表面】

戮力参天(上部横書き)  
 維時大正九年八月十五日  
 夜来天候 陰悪電光閃々 豪雨篠ヲ乱シ  
 山崩レ水湧キ 濁流滔々 堤防ヲ決潰シ  
 道路ヲ破壊シ 田圃荒蕪  
 下加江川流域ハ殆ンド砂磧ト化シ  
 其惨状ヲ言フ可ラズ 生民活路ト彷徨ス  
 茲ニ於テ部民相會シ 一致團結復興ノ議ヲ決シ  
 併テ耕地ヲ整理シ 永遠ノ耕作ニ  
 便セント欲シ 則チ整理組合ヲ組織シ  
 大正十年一月其工ヲ起シ 昭和四年一月ニ至ル  
 其間實ニ八ヶ年 拮据經營地区ヲ整理シ  
 径路ヲ開キ 水路ヲ通ジ 荒廢地域ヲシテ  
 一新生面ヲ開カシメ 灌溉ノ利耕作ノ便  
 昔時ニ倍スルニ至レリ 其整地田ハ五十七筆  
 面積五十九丁余歩 畠十二筆 面積二反七畝歩  
 工費實ニ拾貳万三千四百余圓  
 其内八万二千七百円ハ 無利息年賦償還ノ方ヲ  
 以テ國費ニ資リ 尚□万□千□百余圓ノ  
 國庫助成金ヲ受ケ漸 コノ工ヲ竣ルヲ得タリ  
 是ニ組合長工事係以下 幹部諸氏ノ熱誠ト  
 組合員ノ協力ニ依ルニ非ンバ  
 克クコノ大業ヲ成ヌヲ得ンヤ  
 而シテ後未農事ニ被ルノ  
 徑澤甚大ナルハ言ヲ待ザル所也  
 依テ其概要ヲ記シ後人ヲシテ 鑑ミル処アラシム  
 昭和四年一月 下加江耕地整理組合  
 溝渕素江撰并書

【裏面】(省略)

(碑文通解)

碑文表面には、上部に「戮力参天」の四字熟語が刻まれている。すべての力を合わせて協力して事に当たり、自然の摂理に調和するという意味である。災害を乗り越え、地域住民が一致団結して復旧を成就したとの意味が込められている。大正九年八月十五日夜間天候が険しくなり、雷鳴が轟き、閃光が光り、激しく降る雨に風が吹きつけ、山肌は崩れ、水が湧き、濁流が滔々と川に沿って流れ出てきたこと。濁流は川幅一杯となりついには溢れ出て堤を決壊させ、道路を破壊し、田畑を荒廢させて下ノ加江川流域の殆どが砂漠のようになってしまったこと。その惨状は筆舌に尽くし難く、住民は生活の再建を見いだすことができずに茫然自失としていたこと。住民が評議し、一致団結して復興を決議したこと。整理組合を組織し、大正十年一月に工事を開始し、昭和四年一月に完了したこと。工事期間八年間。地区住民はこの間、農道を付け、水路を通し、荒廢地を一新してめまぐるしく復旧に努めてようやく生活ができるようになったこと。これにより灌溉や耕地の使い勝手が復興前より数段良くなったこと。整理された水田・畑の広さ、工事費及び耕地整理組合役員一同の思いなどが記されている。この碑文を作成し、筆書きしたのは、明治中期に下ノ加江で私塾「溝渕義塾」を開いた溝渕政次郎(素江)であった。

